

# レーン 再び埋まる日を



## 稲沢グラウンドボウル④ 新支配人の葛藤

照明が落ち、並んだままのピンが寂しげに見えた。七月、平日昼すぎの稲沢グラウンドボウル。数組しかない一般客向けのレーンを見て、スーツ姿の男性がつぶやいた。「広いから余計

に空きが目立ちますね」。最近、フロアの天井から掛かる電光掲示板に待ち時間が点灯するはまされた。大勝誠さん(53)は支配人として四月に就任したばかり。「自分なんかでいいのか」。関東の系列店で支配人経験はあったが、フロアに百十六レーンが並ぶ世界一の施設を自分が仕切る姿を想像できずにいた。

幼少期から極度の人見知り。コミュニケーション能力を養おうと、大学二年の時、三重県名張市の自宅近くのボウリング場でアルバイトを始めた。最初、大会の司会進行で人前に立つと、「マイクを握る手と声がぶるぶる震えた」。しかし、集客キャンペーンを練り、レーンがにぎわう喜びが殻を破らせた。「文化祭みたい」な毎日。非日常の空間で、お客さんの笑顔があふれる。そんなレジャー施設が好きになり、卒業後もこの業界で働くことと決めた。

生まれる十五年ほど前のボウリングブームは知らない。レジャーが多様化し、フロアのレーン数で、ギネス世界記録となった認定証を見つめる大勝さん―稲沢市井之口大坪町の稲沢グラウンドボウルで

各地のボウリング場も老朽化。年々、取り巻く環境は厳しくなっていた。それでも、お客さんを楽しませようとしてきた自負はあった。昨年、レジャー施設に打撃を与えた「不要不急」の言葉。新型コロナウィルスの感染拡大で、稲沢グラウンドボウルも書き入れ時のゴールデンウィークを挟んで、四―五月に二カ月間休業。今年に入っても団体予約が減ったまま。それでも、感染が収束していない中「集客しようとするのは、批判されるかもしれない」。大勝さんにとって初めての葛藤だった。

苦境を受け、なわさら世界一の施設を守る責任感が強まる。今年四月の赴任直後、大会で全てのレーンが埋まった光景に感じ入った。「圧巻だった。千人規模の大会はここでしかできない。競技ボウラーが目指すべき聖地にしたい」

コロナ禍の前は、健康づくりを兼ね、ブーム時にボウリング場に通った世代が戻ってきている手応えがあった。思い描くのは、大勢の客の前でマイクを握り、呼び出しのアナウンスをする自分の姿。新支配人の奮闘は続く。(牧野良実)

1フロアのレーン数で、ギネス世界記録となった認定証を見つめる大勝さん―稲沢市井之口大坪町の稲沢グラウンドボウルで

(次回から)二宮・本町商店街(編です)



## プロへの道 二人三脚



### 稲沢グランドボウル③ 師弟関係の男女ボウラー



稲沢さん(右)から指導を受ける筒井さん＝稲沢市井之口大坪町の稲沢グランドボウルで

私語禁止の張り詰めた緊張感の中、ピンのはじけ飛ぶ音だけが響く。二〇一八年五月、東京都内であったボウリングのプロテスト最終日。「今度こそ。何とか合格してくれ」。稲沢グランドボウル(稲沢市)を拠点とするプロボウラー、岩瀬一真さん(四七)は、祈るような表情で目を凝らしていた。

筒井さんの競技歴は浅かった。三十代になったころ、勤めていた会社でできたボウリング部に入った。経験は学生時代に数回程度。最初は数合わせで、名前を貸したつもりだった。「ボールが曲がるのは床の板が傾いているから、と思

っていたくらい」と笑う。ところが、時折、練習に顔を出しているうちに夢中になった。ピンが倒れた時の爽快感と、スコアが伸びていく達成感。二年が過ぎると、一人で毎日投げに行きつづけた。」「どうせやるなら」と、とうとうプロを意識するようになった。会社を辞め、覚悟を決めた。岩瀬さんに教えるを仰ぐようになったのは、プロテストの壁に阻まれていたころ。自宅から稲沢まで車でほぼ毎日通い、付きっきりで見せられた。才能を認められた師匠の下、力は伸びた。だが、大舞台になると緊張し、体が動かなくなるのは相変わらず。一次試験落ちの回数だけが増えていった。

「もう辞めようかな」。自信が持てず、何度もそう思った。踏みとどまらせてくれたのは、岩瀬さんの言葉。「自分が筒井さんの一番のファンだから」。三年前、七回目のプロテストで、初めて一次試験を通過した。二次、三次試験も乗り越え、合格を果たした。プロになった筒井さんは稲沢グランドボウルを拠点とし、現在も岩瀬さんから指導を受ける。楽道家とストイック、技巧派とパワータイプ。性格も投球スタイルも真逆の師弟は、時にぶつかることもある。それでも、目指す針路は同じだ。プロでは結果が出せない筒井さんだが、「いつかは活躍して、恩返ししたい」と誓う。岩瀬さんも「焦らず平常心で臨めば、上位に食い込む実力はある」と信じる。二人三脚の挑戦のゴールは、まだ先にある。(牧野良実)



## 「世界一」の裏側支える



機械を点検する田代さん―稲沢市井之口大坪町の稲沢グランドボウルで



### 稲沢グランドボウル②

### 熟練のメカニック

工場のような空間を、青の作業着の男性が行ったり来たりする。機械の中では、ピンやボールがぐるぐる回る。ちよつとした音の違いや足元の振動が異常を

示すサインという。「どこかの部分がおかしくなりそうか分かるんです」。長年、体に染み付けた感覚が判断を支える。

一フロアに百十六レインが並び、ギネス世界記録に認定される稲沢グランドボウル。国内最大規模の大会も開かれる一大施設だ。照明を浴びたレインの脇の扉を開けると、メカニックの田代勝三さん(50)の仕事場がある。

そこでは、レジャーの空気が一変する。ピンを並べ、ボールを戻す高さ二層ほどの機械が、レインの数だけ並ぶ。端から端まで約二百層。歩いて点検しながら、時折、ライトで照らして機械に体を突っ込む。旧清洲町(現清須市)で生まれ育ち、子どもの頃から、家族で遊びに来ている。当時は一番軽いボールでも八磅(約三・六キ)。

親に言われ、頑張って片手で投げたが、「ガター(溝)の掃除ばかりしてたっけ」と懐かしむ。

裏側の住人となったのは、二十一歳の時。高校卒業後、電気工事や鉄工所の

仕事が続きせず、グランドボウルのメカニックの求人が目にとまった。人と接するのは苦手だが、工作や部品の組み立ては好き。そんな自分に向いているかも、と思えて入社した。

仕事中は、多くの時間を裏側で過ごす。ストライクを取って歓声を上げる家族連れ、スコアを競って盛り上がる団体客の姿もほとんど目にすることはない。客足を感じるのは、動いている機械の数。入社当時はフル稼働する日が多く、モーターの熱で裏側の温度も上がった。「昔は冷暖房がなくて。冬はありがたかったけど、夏はたまらなかつたなあ」と笑う。

ボウリングブームが去り、最近では機械が止まったままの時間も増えた。それでももやもやしてくる人たちのため、整備を万全にする心掛けは変わらない。

当たり前のようにボールが戻ってこなければ、ピンが並ばなければ、もう来ようとは思ってもらえないだろう。「小さい時から家族で来てたら、大人になっても続けてくれるはず」。わが子のように日々、変化を見てきた機械たちが、また一斉に動く日を待ちわびる。(牧野良美)



# この一投こそわが人生



稲沢グランドボウル①

開業以来の常連



①1972年の開業当時から通う川口さん  
②1フロアに116レーンが並び、ギネス世界記録に認定されている稲沢グランドボウル  
=いずれも稲沢市井之口大坪町で



人生で何十万投目になるのだろう。淡々と投げたボールはレーンでいつものような弧を描き、白いピンをはじき飛ばす。多くの人は知らないだろう。稲沢グランドボウル(稲沢市井之口大坪町)の五十七、五十八レーンに陣取るこの男性が、五十年、ひそかに道を究めてきたことを。

「この生き字引ですよ」と従業員たちも一目置く。勉強は苦手だった。体を動かすのは好きだったが、スポーツを気軽に楽しむような時代ではない。中学卒業後、一宮駅前の食堂に就職。月一回の休みに、近くのボウリング場に遊びに行くのが気晴らしだった。

「ボールを投げ、ピンを倒す。単純なようで確認作業は無数にある。複数あるマインボールの選択。レーンのオイルの塗り具合で曲がり幅が変わり、わずかなフォームの狂いで、軌道がずれる。同じ一投は決して大きく飽きることはなかった。

「今、あらためて実感する投げられる喜び。今月、約五年ぶりのパーフェクトに迫った。最後の一投で一本残し、生涯二十三度目の瞬間を逃すと、「くそー、うまくいかないねえ。また頑張らないと」。求める理想の一投は、まだ先にある。悔しそつだが、うれしそつでもあった。(牧野良実)

「この生き字引ですよ」と従業員たちも一目置く。勉強は苦手だった。体を動かすのは好きだったが、スポーツを気軽に楽しむような時代ではない。中学卒業後、一宮駅前の食堂に就職。月一回の休みに、近くのボウリング場に遊びに行くのが気晴らしだった。

根城を定めたのは、二十代半ば。三菱電機稲沢製作所に転職した数年後、二百三十二レーン(当時)を備えた稲沢グランドボウルがオープンした。

「時々はボウリングブーム。同僚に誘われ、通うようになった。「投げるたびにスコアが上がるのが、うれしくて」。仕事を午後五時に終えると、週二、三日、足を運び、多い日は十五ゲーム投げた。好きが高じて社内でもボウリング同好会もつ

なり、がん、心不全と病に襲われた。それでも「ボウリングのない人生なんて」と投げ続けてきたが、昨年春、思いがけずレーンから離された。新型コロナウィルス。緊急事態宣言が出され、ボウリング場が約一カ月、臨時休業した。用もな

七十代を前に心筋梗塞に